

バリ島の文化にふれる

金子 恵美子
(こども学科 准教授)

2019年3月12日(火)～18日(月)の日程で、4回目となるインドネシア・バリ島研修が行われた。学生10名が参加し、2つの幼稚園の見学・交流と2つの大学との交流を行うとともに、バリ島の文化にふれるため、現地の名所を訪問し、有名なバリ舞踊の1つであるケチャックダンスを鑑賞した。日本とは異なる風景、伝統的な舞踊や音楽にふれる経験は、当たり前のことになり特に日頃意識することがなくなっている日本の風景や文化、その歴史について改めて関心をもって考える良い機会になっている。ここでは、バリ島の文化にふれた体験についてまとめ、その中で感じたことを振り返ってみたい。

今回、バリ島の文化にふれるため訪問したのは、空港などがあるバリ島の中心部（バリ島の南部に位置する）から車で約1時間半ほど北に進んだウブドといわれる地域である。バリ島では、ビーチでのマリンスポーツの体験なども人気があるようだが、ウブドは海からは離れており、山や田んぼが広がり、緑が多く自然が豊かな場所である。標高が高いため、雨も多いという特徴があるようで、今回の訪問では雨に降られることなく過ごすことができたが、以前に訪問した際は急なスコールにみまわれ、車から降りることができずに車の中か



ら有名なライステラスを見たこともあった。

研修4日目の朝8時30分過ぎにホテルを出発して、ウブドに向かい、最初にモンキーフォレストを訪問した。

モンキーフォレストは、ウブド地域の中でも南にあるテガルパダン村内の自然保護区の森で、たくさんの猿の様子を見ることができる場所である。モンキーフォレストに到着後、今回の研修旅行で一緒にさまざまな場所をまわり、案内を担当してくれているサラスワティ外国語大学の学生さんたちの案内で、園内を散策することになった。園内には、大きなガジュマルの木などもたくさんあり、たくさんの緑を感じられた。たくさんの猿たちが自由に過ごしており、その様子を学生たちも写真におさめて楽しんでいたが、園内の注意書きに「猿と目を合わせないでください」「サングラス、イヤリングやネックレスなどの貴金属を猿に取られないようにご注意ください」などと書かれていたとおり、猿たちがこちらに向かってくることもあり、



学生たちからはときどき悲鳴があがるなど、ドキドキしながらの散策となった。また、サラスワティ外国語大学の学生さんから、園内にある、ある場所で水の中にコインを後ろ向きに投げ入れて願い



ごとをすると叶うという話を聞き、学生たちは早速挑戦し、熱心に願いごとをしていた。

また、園内には14世紀半ば頃に建てられたというバリヒンズー教の寺院もあり、寺院の中に入ることではできなかったが、周辺にある石像や外から見える建物の様子などから、その雰囲気を感じることができた。

バリ島で過ごしていると、店先などにチャナンといわれるお供えがあったり、家の敷地内にヒンズー教に関わる建物がある様子を見ることができ、信仰心の篤さを感じることが多い。日本でも神社やお寺にお参りすることは多いし、お祭りを大切にしている地域や信仰を大切にしているという家庭もあるが、お祭りなど宗教的な行事も大切にしているバリ島の大学生の話を聞くと、信仰に対する考え方に違いがあることを感じる。また、大学での交流の場のあいさつなどでは、必ず神への感謝の言葉が述べられる。そうした場面からも信仰を大切にしている姿勢やその表し方が日本とは異なること、バリ島の人々のそうした信仰心の篤さが、家族や親戚のつながり、地域のつながりの強さともつながっているのではないかということを感じ、バリ島を訪問するたびに宗教や信仰の意味について考えさせられる。

モンキーフォレストの後は、現地のマーケットへと向かった。通りの両側、さらに通りからのびる横道に多くの店が並んでおり、いろいろな物に目をひかれ、学生たちはお土産選びを楽しんでいた。日本での日頃の買い物でほとんど値切るという



うことをしない学生たちは、一緒にまわってくれている現地の学生さんたちに助けてもらいながら、最初はおそろおそろ値切っていたが、だんだん慣れてくると気に入ったものをできるだけ安く買おうとお店の人とたくましく交渉している姿が見られた。自分で気に入ったものを見つけ、交渉し手に入れた学生たちは、「こんなものを見つけた!」「楽しかった!」と買い物を満喫した様子であった。値切る体験は、慣れないうちは難しく感じるが、慣れてくるとお店の人と電卓をやりとりしながら値段の折り合いをつけることがとても楽しく感じられるものであった。

その後、世界文化遺産にもなっており、バリ島



の風景として有名なライステラスへと向かった。斜面に棚田が広がり、緑が美しく、実際にその中を歩くのも楽しいが、高い場所から広い棚田の風景を見ているとのんびりとした気持ちになることができ、日常から離れてこうした時間を過ごすことの良さを感じることができた。

また、ライステラスの近くでは、ジャコウネココーヒー(コピ・ルアック)の試飲も体験した。ジャコウネコの糞から採れるコーヒー豆を使ったジャコウネココーヒーは、初めは抵抗感があったが香りがとても良いものであった。

モンキーフォレスト、マーケット、ライステラスを楽しんだあとは、遅い昼食をとるためにレストランへと向かった。レストランでは、少し雨に降られる場面もあったが、風の吹き抜ける中でナシゴレンやミーゴレン、魚や肉などインドネシア料理を楽しむことができた。バリ島の料理は、暑い場所であるせいか辛いものが多い。一方で、お茶類はほとんどのものが甘く、日本の甘くないお茶類を飲みなれていると、とても不思議に感じられる。また、魚なども日本では見かけない種類のものが多く、これまでに食べたことのないものを食べ、これは何だろうとみんなで首をかしげる時間もとても楽しい時間であった。食材や味など食事の場面でも日本との違いを感じることが多いが、バリ島で食べる料理はどれもおいしく、毎年楽しみである。



夕方には、ケチャックダンスを鑑賞した。ケチャックダンスは、レゴンダンス、バロンダンスとともにバリ舞踊としてとても有名なものである。

バリ島に古くから伝わる「サンヒャン」という呪術的な舞踊をベースに、20世紀前半に発展したもので、ストーリーはヒンズー教の神話と古代インドの叙情詩「ラーマーヤナ」が基になっているという。男性たちが「ケチャケチャケチャケチャ」というかけ声を発している中で物語が進んでいく。今回の舞台でも、30人ほどの男性たちの「ケチャケチャケチャケチャ」というかけ声の中で物語が展開され、そのかけ声を興味深く思いながら観ているうちに、あっという間に時間が過ぎてしまった。白い猿の神様ハヌマーンの動きのおもしろさや、物語の終わり頃に燃え上がった火を踏み消していく場面の迫力など見所も多く、またバリ舞踊独特の体の動き、衣装の華やかさに、何度見ても新鮮な気持ちで感動させられている。



バリ島では、幼稚園や大学を訪問した際にも小さな子どもたちから大学生まで、バリの伝統舞踊で歓迎してくれることが多い。自国の文化を小さい頃から学んでおり、日常の中でそれが生かされているということに、バリ島を訪れるたびにとても感心させられる。日本では、自国の文化でも体験したことがないものも少なくなく、小さい頃からふれる機会が多いとはいえないように思われる。

バリ島の文化にふれる体験を通して、自分自身も自国の文化を大切にする気持ちをもつとともに、学生たちや子どもたちにも自国の文化を大切にする気持ちをもってもらえるように、自国の文化にふれる機会をたくさん作っていきたいと考えさせられた。